予告

FUTURE EVENT 01

[第37回]
名古屋芸術大学卒業制作展
大学院デザイン研究科修了制作展

3/2(火)→3/7(日)

愛知県美術館ギャラリー[愛知芸術文化センター8階]
10:00〜18:00(金曜日は20:00まで)
[美術学部] 絵画科(日本画・洋画)・美術文化学科 [デザイン学部] デザイン学科
[大学院デザイン研究科]

名古屋市民ギャラリー矢田
9:30〜19:00(日曜日は17:00まで)
[美術学部] 造形科・版画選択コース [デザイン学部] デザイン学科

名古屋芸術大学 西キャンパス
[アート&デザインセンター/洋画Zギャラリー/デザインX棟(和室・302教室)]
10:00〜18:00(日曜日は17:00まで)
[美術学部] 絵画科(洋画) [デザイン学部] デザイン学科

[第14回]
名古屋芸術大学大学院修了制作展

3/9(火)→3/14(日)
名古屋市民ギャラリー矢田
9:30〜19:00(日曜日は17:00まで) [美術研究科・デザイン研究科]

映像作品上映会(修了制作・卒業制作)

3/6(土)・7(日)
シネマスコーレ [名古屋駅西] 18:00開場　18:20〜上映

卒業制作展記念講演会 (入場無料・予約不要)
浅野 徹 〔本学美術学部・教授〕「岸田劉生とその時代」
3/7(日) 14:00〜16:00
愛知芸術文化センター12階 アートスペースA

交通アクセス

愛知県美術館ギャラリー
〒461−8525　名古屋市東区東桜1−13−2
TEL 052−971−5511(代)
地下鉄東山線・名城線「栄」駅、名鉄瀬戸線「栄町」駅下車
オアシス21連絡通路利用　徒歩3分

名古屋市民ギャラリー矢田
〒461−0047　名古屋市東区大幸1−1−10
TEL 052−719−0430
地下鉄名城線「ナゴヤドーム前矢田」駅1番出口より徒歩7分

シネマスコーレ
〒453−0015　名古屋市中村区椿町8−12　アートビル1F
TEL 052−452−6036
JR「名古屋」駅、太閤通口より西へ徒歩2分。ビックカメラ西南、ミニストップ向かい

2010 3- EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:00−18:00(最終日は17:00まで) 日曜祝日休館　入場無料　どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

3/2(火)→3/7(日)　名古屋芸術大学卒業制作展
[美術学部] 絵画科(洋画) [デザイン学部] デザイン学科
3/8(月)→3/27(土)　春期休館
3/28(日)→4/14(水)　デザイン学部レビュー選抜展

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるが下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

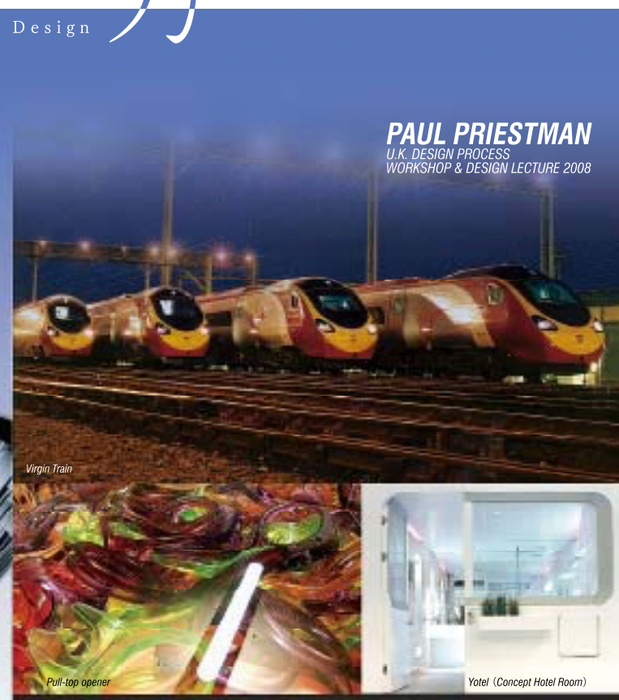
大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

名古屋芸術大学 Art & Design Center
NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　TEL[0568]24-0325　FAX[0568]24-2897

B!e Vol.27
発行日　2010年2月26日
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp
2009　Printed in Japan ©　Art & Design Center, Nagoya University of Arts　デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
B!e
NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS　ART & DESIGN CENTER　NEWS
2010. Vol. 27

デザイン力
The Power of Design



デザイン力が鍵

赤ちゃんからお年寄りまであらゆる人たちが、快適に暮らせる街作りを願っています、それに答えられるのは、「デザインの力を使って社会へ提案できる人」です。小さい事からでも一つ一つデザインの力を使って、街や人に「ほらほら、こんなに使いやすく、暮らしやすくなったよ」と言われる街を作ってゆきましょう。

ナゴヤデザインウィークのイベントに関連して、毎年秋はイベントシーズンです。名古屋芸大の各コースでも様々なデザインイベントを名古屋市内中心部で開催しました。

インダストリアルデザイン研究室展

我が研究室も、デザイン啓蒙活動に一躍買って出て、過去3年間に特別客員教授としてお迎えした、ジェームス・ダイソン／ポール・プリーストマン／奥山清行氏の作品発表、それに加え、今までの「金の卵展」(全国約30校の芸術系大学3年生の選抜作品展)で、名古屋芸大から選抜された提案作品を展示しました。内容は「子供用防災頭巾付きランドセル」「子供靴の底のすり減り方から、外反母趾などを早期に発見できるシューズの提案」「お祭りやキャンプ場で使うリユース可能な器」など社会に役立つデザインについて、少しでも街の人々に認識をしてほしく、商業施設でもあるラシックの小さなスペースで紹介展示を行いました。作品展示ギャラリーのカウンターでは、陶磁器メーカーの(株)深山の協力で、デザインカフェもオープンし、デザインを通じてコミュニケーションの場も提供しました。

奥山清行デザインワークショップ

期間中会場で、奥山清行デザインワークショップの中間発表を行い、前回提案された、「地元の伝統産業の職人さんと話をして、その伝統技術を使って、新しいアイデア提案」や、「これからのEV(燃料電池)を使った移動車両の提案」のプレゼンテーションを行いました。奥山さんからの鋭い評価やアドバイスに、いつもの大学内での講評会より、学生たちが真剣な表情でアドバイスを受けていたのがとても印象的でした。なかなかデザインのイベントや展示会が街で開催されないため、遠く浜松からも多くの学生が見に来てくれました。

デザインの効用や意味は目に見えないので、いつまでたっても市民に浸透するのは難しいけれど、今回はデザイン学生やデザイナーから街の人たちにデザインで元気になってほしいというメッセージを幅広い発表の方法で効果的に表現していました。

和田義行　デザイン学部インダストリアルデザイン選択コース　教授

奥山清行デザインワークショップ会場

枡工房への新しい商品提案

枡（檜の良い香りがする祝い酒を飲む器）の全国シェアの80％を生産しているのが、岐阜県の大垣市と言う事は、恥ずかしながら私もその事を聞くまで知らなかった。日本酒は飲まれなくなり、節分や結婚式で使う程度では販売促進は低迷の一歩をたどってしまう。枡工房の若い社長は、そんな状況を打開するため、現代社会で新たな使い方の提案をと、2005年に枡専門ショップをオープンさせた。今回はデザインウィークに新しい枡の提案発表展を目標に、枡の新たな可能性をワークショップ形式で学生とデザイナーが様々な角度から市場動向や作りを調べ、枡製造技術を使って新たな新商品の提案に力を注いだ。まず職人さんの生産の場に何回か足を運び、多くの機械を使って作り上げてゆくが、肝心な所は人の技で一つ一つ丁寧に仕上げられて行く枡作りの過程を学び、アイデアを展開させ、試作品を作りながら提案展へ向けて作品を作り上げて行った。

大学院デザイン研究科3Dユニット1回生
守屋涼太さんの「茶香炉」

大学院デザイン研究科3Dユニット2回生
林 静誼さんの「日本庭園をイメージした景色の変化を楽しむ器」

デザイン力

The Power of Design

産学協同プロジェクト
スペースデザイン学生とサイトーウッド株式会社

曲げ木の室内用ゴミ入れを、学校や家庭で使ったことのある50代以上の人は、「あっ、あの高級なゴミ箱か」と良く覚えていると思います。このゴミ箱を制作販売していたのが、静岡のサイトーウッド株式会社。

60年代の商品を見直し、二代目の若い社長さんが、今の生活スタイルに対応した、新しい商品開発をと、スペースデザインコース学生を主体に新たな商品開発を行いました。その中の何点かは、現在商品化され結構売れています。

有松／鳴海絞り ワークショップ

江戸時代初めに手拭いを旅人に売り出したのが有松絞りのはじまり。

デザインウィークの一環として、この伝統的な有松絞りの技術を使って、ワークショップ形式で新たなアイデアを作品として制作し、展示発表会が行われました。インダストリアルデザインコース３年生の草野敦子さんの作品は、「家庭での食事の時間がより楽しくなるランチョンマット」の提案。会場で欲しい商品アンケートで１位でした。

「メ～ブツ展
ー新しい名古屋みやげの提案ー」
マルハチボタン

2003年度IDコース卒　三浦未由希さん

○に八。この名古屋の市章は、眼をこらしてみればすぐにでも見つけることができます。マンホール、市バスや地下鉄の車両、商店の営業許可証などなど、名古屋の街の中にとけこんでいます。この名古屋のマークを今度は人の服装の中にとけこませてみようと、ボタンにしてみました。このボタンはそこらにあるボタンとなんら変わりない普通のボタンです。

でも、糸を通してみれば、“○に八”になるのです。これからは名古屋市内だけでなく、さまざまな場所で見つけられるようになるかもしれません。

ディスプレイデザインコンペ
優秀賞受賞

スペースデザインコース　3年生　奥田真美さん

与えられたテーマ「レッツクリエイティブ」に対し、大学はいろいろなものが、生み出されるところ。学生はそれぞれの卵から今まさに生まれ出たひよこにみたてたアイデアで応募し、みごと優秀賞を獲得。名古屋市中心部栄の名古屋銀行本店ディスプレイを約1ヶ月に渡って飾りました。

REVIEW

美術系学生選抜展　美系優秀【ビケイユウシュウ】2009

2009年12月3日［木］ー 12月20日［日］　文化フォーラム春日井

―美術系大学優秀学生の略。文化フォーラム春日井で開かれる展覧会。愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学から15組19人の優秀学生を紹介する展覧会。ただし、先生から優秀と言われたとたんに、芸術家としての大切な芽を摘まれているかもしれないので注意されたい。―

吉田瑠志有さん（右）

福本百恵さん

坂本和也さん

安田珠美さんのデザイン

2003年に始まった「美系優秀」展は、三年ごと三回目の開催を迎えた。筆者は本展の運営委員として計画時から関わっているが、この企画がやっと地域の文化施設としての役割を担い、そして施設のスタッフが試行錯誤しながら確実に実践力を備えてきたことも感じている。

さて、冒頭にあげた展覧会のリード文が第一回展から使われているように、当初からこの企画には「選抜」することに重きを置くのではなく、未熟ながらも何かを探り作り出そうとする学生の存在と作品に注目したものである。今回は一人5mほどの壁面長と空間に自作を展開させた面々。三大学の学生たちは、大学や表現形式で区切られることなく、ひとつの企画としてまとまっていた。

本学からは、洋画コース２年の**坂本和也**さん、造形選択コース３年の**杉浦仁実**さん、日本画の研修生2年目の**福本百恵**さん、洋画コース４年の**前川宗睦**さん、同時代表現研究大学院一年の**吉田瑠志有**さんが参加した。12月５日（土）の午後にはギャラリーツアーとして、参加学生全員が自作の前で一人ずつ語る姿があり、学内とは違った観客を意識した場として、なかなか頼もしいものであった。親しい仲間うちでのグループ展とも違い、同時代をそれぞれに創作に取り組む姿の交差には、等身大の緊張感があった。また、展覧会運営を担当した文化フォーラム春日井（財団法人かすがい市民文化財団）のスタッフのひとり、**越賀登紀子**さんは本学美術文化学科の卒業生でもあり、彼女もまた同僚や先輩らとともに奮闘していた。そこには、表現を紹介する場に関わる自負と正直で丁寧な態度を垣間みることもできた。

また、今回はデザイン学科メディアコミュニケーションデザインコース３年の**安江珠美**さんが、展覧会のチラシとカタログのデザインで参加。櫃田珠実先生の指導協力を得て、的確で清々しいデザインワークが展開された。大学が公共の文化施設との連携を進めていく事業は様々にあるが、要は双方の率直で正直なコミュニケションが基本だと思う。文化施設の機能もまた模索されているなかで、この企画が継続されることの意味とは何か。後にこの地域に縁を得た若手作家の存在こそが、「美系優秀」の意味を実証してくれるに違いない。

“嘘のない”企画になりつつある、そう思っている。

高橋綾子　美術学部准教授

前川宗睦さんとスタッフの越賀登記子さん

会場風景（撮影：福岡 栄）

杉浦仁実さんの作品を囲んで

ART WORDS FROM THE ART WORLD

豊田市美術館館長
吉田 俊英
Toshihide　YOSHIDA

芸術一話 第3話 いくつもの日本美術史

「美術」や「絵画」という言葉が使われ出したのが明治期に入ってからということは皆さんご存知だと思います。それと同じく「日本美術史」が出来たのも、鎖国を解いて早く諸外国に追いつけ追い越せと国中が躍起になっていた明治期に、西洋美術史を手本に作られました。

この「日本美術史」何だか変だと思いませんか。どの本を見ても古代～中世は上方中心の文化や美術で、鎌倉が少し入り、江戸中期以降は江戸・東京中心の文化と美術になって行く。これって政治史そのものではないでしょうか。確かに美術や文化は時の政治や経済と離れがたく関係し、影響を受けている部分はあるけれど、それ以外の地域に文化や美術は存在しなかったかと言えば、そんなことは全くありません。政治の中心が奈良・京都や江戸・東京にあった時代にも、他の地域にも豊かなそれらの地域とは異なった文化や美術が存在していました。あるテレビ番組でも全国に各県それぞれの風習や食べ物の文化が実に豊かに存在していることを紹介しています。

「美術史」も決して固定した一つのものではなく、常に異なった視点から検証しつつ作られて行くべきものだと思います。現にジェンダーの視点からの美術史なども先学によって検証されています。アンチという位置づけではなく、今ある日本美術史を骨としたら、それに肉を付け、血を通わし、生きた日本美術史にするために、様々な地域でそれぞれの美術史を掘り起こした「いくつもの日本美術史」が書かれるべき時に来ていると思います。そしてそれは将来必ず各地域独自の創作活動につながって行くと確信しています。